

秀作

# 真の経済を支えるものは

福井県・福井県立藤島高等学校 2年 山内 浩平

ガンジーは言った。労働なき富は社会の七悪の一つだと。しかし日本では、まさにその類の巨万の富を得ている者が存在する一方で、働いても生活保護水準以下の生活しかできない貧困層が増加しているという。そしてそれは労働に対する意欲や創造力など、個人の努力で改善できるものではない。「労働への意欲や勤勉」ということが、現在の社会構造の中で気づかないうちに隅に追いやられようとしているのだとしたら、僕達にとっても未来の日本にとっても大きな問題である。

そんな危機を感じたのは、半年ぶりに帰省した従兄の話だった。半年前、彼は派遣社員として販売の仕事 시작했다。3か月間は研修期間で、勤務状態が良ければ正社員になれると希望に満ちあふれていた。彼の意気込みは本物だった。買い物に行った時、流行の先端を追いかけていた彼が、お客さんから信用や安心を得られるネクタイ選びに悩んだ。カッターシャツを1枚ずついいねいに選ぶ姿を見た僕は、彼が社会人として着実な第一歩を踏み出したのだと感じた。

1か月ほどたつと、彼は、都会の繁華街の支店内で一番の売り上げを続けられるようになった。「3か月が勝負だ」と言っていたように、快進撃を続けた。しかし約束の3か月が過ぎても正社員の話はない。そして最近、成績が優秀だという理由で、正社員でもさせてもらえない店長候補の仕事を与えられているが、

同じ仕事をする正社員より給料も待遇も格段に悪い。それどころか、このままだと1年契約のままで、来年の保証はないのである。それでも彼は、上司から正社員以上に能力を認められたということだから、そこでがんばるつもりだと笑顔で話した。

彼は終始、穏やかだったが、僕の怒りは収まらなかった。「オトナ」はえさをぶら下げ食いついた獲物がちょっと使えるようだったら、使えるだけ使い、しぼるだけしぼり、あとはぼろ雑巾のように捨てるつもりなのだ。経営者は成績を上げ続けてくれるのなら、きつと彼の明るく穏やかな個性など必要ないだろう。その彼の人格こそが良い成績を上げられる最大の武器なのに……。

結局、格差社会の中で、初めに敗者コースのスタートラインに立ってしまった人間は、違うコースに飛び乗ろうとすると、コースアウトと判断されて失格にされてしまうのか。怒りをぶつけようとした時、従兄が避けるように席をはずしたので、僕は彼が苦しんでいるのかもしれないと初めて気づいた。

実は、その場に居合わせた親戚中の誰もが彼の話に不安を感じていた。それを踏まえて祖母は、「一生懸命働いている彼を責めてはいけない」と皆に諭した。「いい加減な男だったのに、今の彼の落ち着いた言動を見ていれば、たくさんの苦勞をしたことがわかる。苦勞を乗り越えんと人間は練れてこんもんや。それが

感じられるんだから、皆で励ましながら見守らんとあかん」と話すと、皆が納得した。それに彼の不安は、誰よりも強いに違いないのだ。

その夜、彼は、僕に卒業後の進路を尋ねてきた。僕は、部活動にかまけて勉強をしていないこと、周りの友達が塾通いをしているのに自分だけ部活動に熱くなっていて、思うように成績が伸びずに、進路も決めかねていることを正直に話した。すると彼は、「高校時代は大学に進学したら自分の道が決まると思っていただけ、進学してみたら自分の本当に学びたいことがなかった。もっと高校時代に真剣に考えるべきだったと後悔している」と寂しそうに話した。そして大学在学時代に資格を取得しなかったことも大変、後悔していた。

彼は今、就職に結びつく資格が欲しい。しかし資格を取りたいと思っても、勤務時間が長時間であるうえに不規則で、講習が行われる土曜や日曜は仕事を休めない、希望する講座が受講できない。穏やかな笑顔の奥から、現在の不安定な状態から脱却する糸口を見つけれない悩みが、悲痛な叫びとして僕の心の奥にしみこんだ。

そして、彼は転職願望があることも話してくれた。しかし「正社員」という言葉を求めても、実際にはそんな待遇は期待できないのが現実だ。また自分の能力の発揮できる職場ではないと失望して短期間で転職を繰り返したりすると、社会には能力の無い長続きしない人間と思われかねないというのだ。年齢が上がれば上がるほど正社員になる道がいつそう狭くなることも覚悟し、営業や販売のノウハウをできるだけたくさん学ぶつもりだと話し

てくれた。ただ、今は部屋を借りるお金や生活する収入はあるが、この仕事がなくなると、24時間営業のどこかに寝泊まりして、携帯電話一本で仕事場へ向かう若者の一人になるかもしれないと言った彼の言葉を、僕は冗談として聞き流せなかつた。

日本はバブル経済崩壊以降、消費の減少やデフレが進行したため、企業は人件費の削減を行った。現在は終身雇用制は崩壊し、企業は賃金の高い正社員を減らし、賃金の安いアルバイトやパート、契約社員、派遣社員を労働力としている。さらに外国人労働力を製造現場に使うことによってコスト削減に成功したことは、国内の労働力を必要としないばかりか、デフレを進行させ、正社員の新規採用を抑制している。

メール一本で仕事の派遣先を決め、次の日には違う職場へと向かわせるのが、現代の雇用主と労働者の人間関係である。企業は、人材の養成や仕事への創造力を捨ててコスト主義に徹底し、次々と排出される若くエネルギーにあふれた僕達をまるで使い捨てのモノのようにしてしまうのか。

働く意欲があっても雇用の不安と背中あわせで働いているのでは、個人の能力を十分に発揮できないどころか、労働意欲が低下することも懸念される。さらに現在の日本には、従兄よりもっと過酷な状況で働かざるを得ない人達もあふれている。仕事をかけもちしても、定職に就きたくても定職がもてずに貧困から脱出できない。こんな社会を健全な社会と言えるのだろうか。

今、労働力は戦後の高度成長経済を支えて

きた人達から若者に移行しようとしている。しかしコスト主義に走り続ける経済は、彼らが長年構築した仕組みを否定するものである。世界の動向に敏感に反応した結果なのかもしれないが、利益だけを追求していると、かえって経済が破綻する日は近づいてしまうような気がしてならない。

最近、僕は、学校の行事や部活動に没頭している自分が不安になることがある。夏休みのほとんどの時間をそれらに費やし、先輩や友人と協力して、体育祭の応援やダンス、ソフトテニス部の練習にうちこんだ。苦手なダンスに取り組んで体育祭の応援で優勝できたこともうれしかったし、中学から続けているソフトテニスも夏の県大会で初めて優勝の経

験を味わった。しかしその充実感や達成感は、将来の日本社会では、単なる自己満足として扱われ、逆に邪魔な存在として否定されるものかもしれないのだ。

格差社会。今の僕達にとって避けられないこの現実には、夢や希望を奪い、個人主義をあおる。しかし危機に直面した今こそ人間の真価が問われる時だ。僕は、今まで日本社会が大切にしてきた人間の尊厳を通す生き方をしたいと思う。お金は欲しいが、お金だけに価値を見いださずに人間として人と人の絆を大切にし、社会の一端を担いながら生きていたいと思う。ガンジーの言うように、そういう労働はきっと人間を成長させ、それが社会経済の真の成長を支えるものだと思っている。